

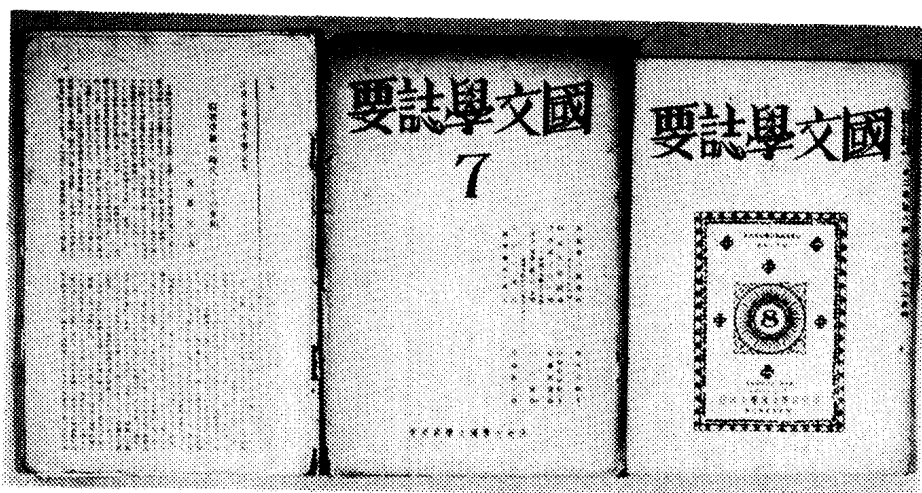
法政大学国文学会小史：主に戦前の活動について(法政大学国文学会創立40周年記念特集)

著者	島本 昌一
雑誌名	日本文学誌要
巻	16
ページ	106-114
発行年	1966-11-26
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019172

法政大学国文学会小史

——主に戦前の活動について——

島 本 昌 一



「国文学誌要」第6・7・8号

1934年

1 はじめに

国文学会への回想は、これまでたびたび試みられた。しかし、終戦後の混乱の中で、学会の果して来た仕事を客観的に示す資料は殆ど失われていた。個々人が資料にもとづいて自由に検討することが出来ない時、せつかくの貴重な回想も懐旧的と受取られ、受継ぐべき伝統としてではなく、単なる伝説と化してしまう。

筆者はこの機会に失われた資料の収集・整理につとめてきた。この小史はその最初の報告である。

国文学会がどのようにして生れ、どう発展していったかを明らかにしていく中で、特に意をそそいだ所は、あの戦争の生み出す狂気と混乱低迷の時代に、学会がどのように学的良心を守ってきたかということにある。国文学会には、二つの重要な時期があった。

一、昭和十年前後の国文学会充実の時期。

一、昭和二十年以後の国文学会再建の時期。

しかし、後者については今回力およばず、問題提出にとどまっている。表面的には沈黙を守らざるをえなかった戦争末期に何が用意され、それが戦後どう展開していったのか、改めて問われなくてはならない。

2 国文学会設立とその事業（昭和元年～六・七年）

夜学を主とし法律を教えていた法政大学は、大正九年、新大学令によって昼間を主体とする総合大学となった。

文学部の濫觴は、副業として始まった予備校（予科）に漱石門下の学者が集まり、人気を博していたことにあるらしい。やがて新大学令によって、予科（中学校四年卒か五年卒かによって三年と二年

の二部制に分れた)の上に、法文学部と経済学部がもうけられ、一貫した教育体制が確立してくると、予科の中に文学部設立の動きがあらわれ始めた。

まず教授陣をととのえるため、すぐれた教師を招いている。国文学関係では、大正十一年国学院大学より小山竜之輔が移ってきた。

こうして大正十二年、法文学部の中に文学部と哲学部が設立され、安倍能成が主任となったのである。(文学部が正式に生まれたのは戦後であるが、当時からこの両科をあわせて文学部と一般には呼ばれていた。)

その文学科の中に国文学専攻科が生まれたのは、さらに一年遅れて大正十二年のことである。昭和二年には六名の第一回卒業生が送り出された。ただし、文部省への申請がおくれたため、卒業は全員七月であった。

一方、安倍主任は大正十三年四月に退職し、後任の和辻哲郎も同年十二月には退職した。小山竜之輔はその後をついで主任となり、昭和六年、主任制度が部長制度に改まって松本潤一郎が文学部長になるまで主任を引継ぐことになる。(同年、小山竜之輔は高等師範部部長となり昭和九年には大学予科長となるのであるが、国文学科に関しては、近藤忠義が昭和九年専任教授につくまで責任をとっている。)

当時の国文学科の学風がどのようなものであったか、第一回卒業生の入学動機をみてみる。

盲人萩田松韻のみうちであった萩原義彦は、生涯を盲人教育に捧げたいと思って入学したという。また曹洞宗曹源寺に生まれた久我義勇は、後に「日本精神史研究」に収められた和辻哲郎の「沙門道

元」に影響され、仮名法語を学問的に学びたいと思い、国文科の設立を待って入学している。(尤も和辻哲郎に国文科でならったものは、道元でなく、西鶴の好色五人女であったらしい。)

以上からも大正時代の文化主義的関心が強くうかがわれるであろう。事実、法政大学文学部は、漱石・西田門下の新進気鋭の学者があつて、きわめて自由な文化主義的雰囲気満ちていたのである。国文学科もその例外ではなかった。

小山竜之輔は、東京大学で芳賀矢一に学んだ(明治四十年卒業)。専攻は古代文学であったようだが、一方、詩や小説も書くという文人肌の学者であつて決して古い国文学者のタイプではなかったのである。作品の鑑賞法が教授の開いた道であつた。

国文学会は昭和元年(大正十五年)に設立されている。

来春には卒業生も出るというので、十月、学生十数名が萩原義彦宅にあつまり相談会をもつた。次で神楽坂クラブで発会式をあげ、会則を議決している。それによると、会長は国文学科の主任が当り、年二回の総会が開かれることになっている。かくて国文学会は、次に示すように、会則第五条に則して、講演会・講習会をかなり頻繁に開くことになるのである。特に春期は新入生歓迎の意味をかねて講演会を開くことが常例となつていった。

昭和元年十一月十六日、第一回国文学鑑賞講座(於講堂)

能楽の研究

野上豊一郎

日本文学の幽玄に就て

竹岡 勝也

出家とその弟子

小山竜之輔

昭和二年五月二十六日、第二回国文学鑑賞講座(於講堂)
次で昭和三年には学蘭外に進出し、読売講堂において、古典と明

治文学との講座をもうけている。

昭和三年五月十九日、第三回国文学鑑賞講座（於読売講堂）

昭和三年六月二十三日、第四回国文学鑑賞講座（於読売講堂）

内容は省略するが、特に前者古典の部は、東京女高師、日本女子大学などから団体聴講があつて読売講堂開設以来の盛況といわれたという。

夏期講習会は昭和二年より開かれた。第一回夏期国文学講習会は昭和二年七月二十五日、八月七日に開かれた。応募者は非常に多く、朝鮮・青島・北海道各地からも参加し、修了証書を発行した。翌年の第二回は規模を拡大している。内容は次の通り。

第二回 夏期国文学講習会

第一部（七月二十五日、三十一日）

詩歌鑑賞の実際と理論

明治初期の社会と文学

白拍子と歌謡

和歌史上の定家

連句の形式に就て

第二部（八月一日、六日）

白楽天と国文学

平家物語と神の信仰

文学論

芭蕉 蕪村 一茶

現代文学の鑑賞と教授

科 外

宝生流謡曲、袴能、仕舞見学。星野日子四郎秘蔵浮世絵展覧。

このほかにも文学部主催の講演会・講習会があつた。

前述したように、当時の文学部は、漱石・西田門下の俊英を集めていたが、彼等は学問を学園内にとじこめることなく、広く市民に公開・解放していくことに力をそそいだのである。その取組においても国文学会は着手に早かつたといえる。

しかしながら、風格ある教師が集まり、対外的に名声が生まれてくると共に、大きな矛盾が現われてきたのである。名声をしたって学生は年々増加するとはいへ、文学部は経営的に全くの赤字であつた。それに学校は、宣伝のため著名な教師を招こうとするので、必然的に講師が多く、休講が甚だしかつたという。一方、専任教授は基礎的な重要な講義を独占せざるをえなかつた。

試みに昭和七年度の国文科講義内容をみてみる。

一、日本文学思潮（国文学史）

小山竜之輔

一、和歌俳句の鑑賞

〃

一、国文学の理解と味解

〃

一、新古今集の鑑賞

〃

一、西鶴 万の文反古（国文学特殊研究）

藤村 作

一、三馬 浮世床講読（国文学演習）

和田 万吉

一、国語学

小林 好日

一、和泉式部日記講読（国文学演習）

〃

一、狂言と謡曲（国文学演習）

湯沢幸吉郎

一、支那哲学思潮（支那哲学）

高田 真治

一、明末清初に於ける諸詩家の風潮（支那文学）

小見 妙馨

一、支那文学略説（漢文学）

長沢規矩也

このほか仏教概説、教育学なども必修であつた。学生数は六八名

(うち選科生二名)である。この中で小山主任以外は皆講師であつて、主任は重要な四講義をもっていた。他学科においても、事情はほぼ同様であつたであろうが、教室はまさに風格のある教師の独壇場であつた。

では国文学会はどうであるか、少し年代をさかのぼって昭和五年をみてみるとなかなか活発である。

昭和五年六月十四日、第三回文学講演会(於読売講堂)

人麻呂の写実

土屋 文明

上田秋成論

佐藤 春夫

新古今における有心美と幽玄美

久松 潜一

日本的といふこと

谷川 徹三

三馬と一九との美

小山竜之輔

「法政大学新聞」第二号は、入場料三十銭とし、「この催しは国文学会としては最初の外部的進出であると共に、我が法政文学部の名を輝かすものとして意義がある」とうたっている。(注)

公開講義はこの頃は文学科全体で取組むようになっていて、小山竜之輔、田部重治、豊島与志雄、野上豊一郎、森田草平の名が並んでいる。

昭和五年十月四日より、第二回文学部公開講義が開かれている。

しかし、このような活動が「法政文学部の名を輝かすもの」であっても、国文学会は学生の学問的交流の場とはなっていないかった。

昭和六年春、小山竜之輔は野球部をつれてアメリカに遠征した。帰国後の第二学期、国文学会は新しい様相を呈し始めるのである。

「法政大学新聞」第十七号(昭和六年十一月二十日)は「紛糾の国文学会 うやむやに終る」と題して次の記事をのせている。

委員会の不統一から十分な活動なく、今まで冬眠の状態が続けていた国文学会は、一部の人々の要請により去る十六日午後一時より八番教室で総会を開催し、会則変更、学会発展策、活動方法等を議題に上げ、今学期中に講演会を開催することに可決したが、時期すでに遅く、委員はその任に堪えずと辞表を提出し、その間、委員怠慢等を叫び、ために一時不穏な形勢となり一紛糾する模様であつた……云々。

(注)第一回の講演会は昭和二年二月十九日で「国文学講演会」となっている(会報No.13の写真参照)。なお法政大学新聞の国文学会最初の外部的進出という記事は正確でない。講演会としては最初ということであろうか。

3 機関誌「日本文学の再認識」創刊(昭和七・八年)

新しい動きはいつでも学生の学びたいという要求の充たされない所から起ってくる。教室では名講義があり、国文学会は学園外に進出したにもかかわらず、それがそのまま国文学会の充実ではなかった。会長の不在であつた昭和六年、国文学会は何もしていない。そしてこの期間に、これまで表面化しなかった矛盾が明るみに出てきたのである。昭和六年、この年はあたかも満洲事変に突入しようとしていた。学生はまず何よりも鋭敏に同時代と交渉していたのである。受動的な鑑賞法でなく主体的に学ぶことを求め、相互の討議の場、演習の場を要求していた。

研究会は従来の鑑賞会的なものから、学生中心の主体的なものに変ってくる。また学生の創作・批評活動が活発になって、長続きはしなかったが様々な試みが現われてくるのである。しかし、まず特

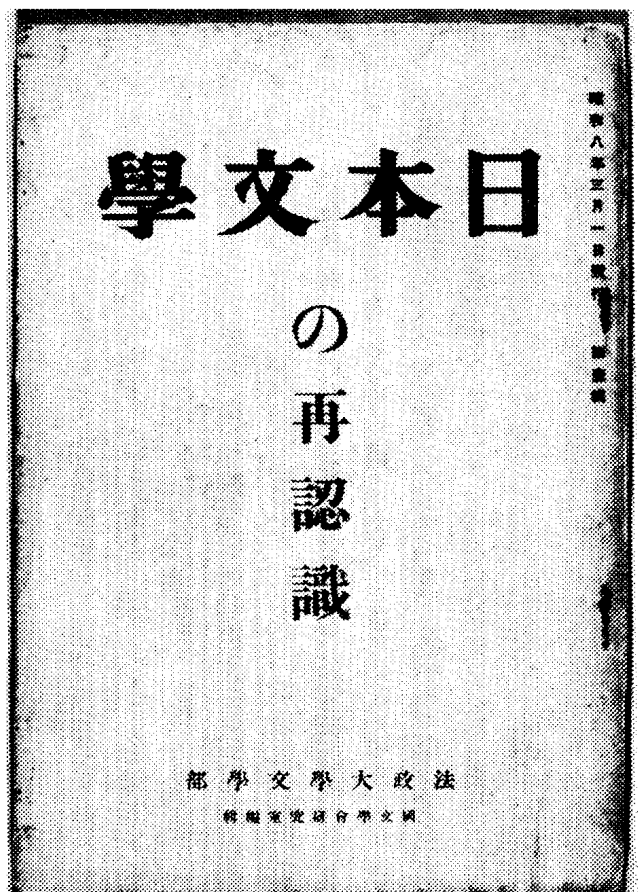
記すべきは「国文学会会報」の創刊（昭和七年七月）である。

その内容は、全く会員の消息機関紙に過ぎなかったが、これを創刊するには激しい対立を必要とした。編集者の一人は同紙で次のように言っている。「昨年委員怠慢とか国文学会刷新の烽火をあげたのは吾々です。しかしそれは一部の人が考えている様なテロリズムではないので、何処迄も浄化運動であり、向上に対する運動だったのです」。これはやがて、内容の充実となって現われる。

すなわち、昭和八年八月に出た会報第三号はタブloid版で内容は小論考中心のものに飛躍している。第四号（同年十二月）も同じくタブloid版であるが、名称が「法政大学文学部国文学誌要」と改まった。今後は研究の発表機関としての意義をもたせるためであると改題理由が付されている。

この「誌要」という名称の由来はさだかでない。ただ完成した長論文を世に問うという姿勢でなかったことは確かである。研究ノート（要点）を互に交換しようという主旨は、国文学誌要が対社会的にも成長した最後まで一貫して後記に記せられている。要するに「誌要」とは、互に研究上の問題を鋭く出しあって学ぶ機関誌という意味であろう。次の飛躍は、それをそのまま対外的に発表していくかどうかにかかっていた。

すこし時期がもどるが、国文学会の機関誌「日本文学の再認識」は同年三月、このような雰囲気の中で生まれた。百二十七ページの堂々たるもので、「国文学会では絶えず全会員が会報が欲しい、機関誌が欲しいと叫んでいた」（法政大学新聞）というその機関誌ではあったが、学生には不評であった。同年秋期総会では名称の改題が議決され、「国文学研究年誌」として原稿が募集されている。昭和



九年の国文学誌要第五号、第六号では、「国文学論攻」と更に改題されて原稿募集があるが、原稿が集まったようには見えない。かくてついに、誌要第七号で廃刊が宣言せられた。（原稿募集の規定も、誌要が二百字づつ原稿紙四十枚以内であるのに対し、枚数制限なしというものであった。）学生は研究の刺戟になるような問題に充ちた若々しい雑誌を望んだのである。「日本文学の再認識」はいわずらに名前を変えたのみで第二号を出さず、昭和九年秋期総会以後は、「国文学誌要」が正式の国文学会機関誌となったのである。

このように誌要へと結集する国文学会の活動をあげておく。

(1) 研究会では、鎌倉文学研究会（昭和八年度より）をあげなくてはならない。これまでの研究会と異なる二つの特色をもつからである。
(4) 研究会の内容は方丈記の輪読であるが、従来の鑑賞的なものと

異なるのは、鎌倉時代を単に過渡期としてとらえることに反対し、独立した時代としてみようとする史的展望のもとになされていること、および、(ロ)卒業生と在学生の共同研究であって、双方から幹事を出し合って運営していることである。(卒業生が来るので研究会は夕方より行なわれた。)研究が主体化されていくのを見ることが出来る。

(2)創作・批評活動では、法政文芸研究会を結成し、雑誌「外濠」を出している。(昭和八年十月刊か。なお、法政新聞第三十七号には、第二号が十一月に発行される予定とあるが、これは出たかどうかかわからない。翌九年二月には、ほぼ同じメンバーが新文芸研究会を結成し、「新文芸」を創刊しているからである。この雑誌も第二号は出していない。ただ近藤忠義、熊谷孝など後に誌要で活躍するものが加わって新しさを示していることが注目される。)

以上述べたような国文学会の主体的な動きや、相互の学問的交流が深まるとともに、これらは学校の授業体制と鋭く対立していき、小山主任との溝を深くしていった。

それに拍車をかけたものは、昭和八年秋に始まった有名な法政騒動である。漱石門下の学者が二派に分れて互に相争った事情は、「法政大学八十年史」にくわしい(二六六頁参照)。小山主任も森田草平側に立ち、かくて国文学会もその渦中に落ち込んだのである。

昭和九年二月、小山竜之輔は野上豊一郎のあとをおそって大学予科長となり、国文学会から全く離れていった。

この昭和八年は社会全体でも、学問の自治・研究の自由が鋭く意識にのぼった年であった。京大の滝川事件を契機とし、法政大学にも、自由主義研究会が生まれ、十一月十五日の発会式には国文学会

も参加している。

4 国文学誌要の発展(昭和九年・十一年)

前述したように学生が求めていたのは、一緒に学問を考えてくれる教師であった。

昭和八年、近藤忠義が講師となり、翌九年には専任教授となった。教授は東京音楽学校を思想問題でやめ、法政大学に移ったのであるが、以来、国文学会会長として学生とともに国文学会を建設していく。

同じく九年には、片岡良一が講師となったが、七月、専任教授として迎えられた。教授も思想問題で府立高等学校を退き、法政大学に移ったのである。以来、国文学会の副会長として学生とともに近代文学研究の基礎を打立てていく。

このほか講師では、すでに昭和七年より長沢規矩也が教鞭を取っている。九年には岩淵悦太郎、十年には西尾実が迎えられた。こうして国文学会は今までの面目を一新し若々しく充実した学会に生まれ変わったのである。この充実はやがて誌要を通して対外的にも大きな影響力を与えていくのである。

まず学内の充実については、研究室の建設をあげねばならない。これは講義終了後、具体的に学生指導の場としてつくられたものである。研究室基金寄附計画をつくり、図書・物品の寄贈を受けるため、会長みずから交渉にあたった。誌要の彙報欄は毎号、学会内外の人から送られる寄贈物の目録でうずまわっている。学会が一体となって建設している様子がうかがえるのである。こうして昭和十年二月、会報の臨時特集号を出し、研究室規定、図書貸出規定を定めた。

当時、「解釈と鑑賞」（昭和十二年四月号）には異例の国文科単独の入学案内がのっている（写真参照）。これをみても「研究室にて教授・講師の研究指導あり」と明記されているのである。いわば研究室は、国文学会が営まれる根拠地であった。

誌要は昭和八年度、消息機関紙から発表機関誌に発展して来た。

このかげには近藤忠義の援助があったであろう（まず編集部を確立している）。第四号のタブロイド版は保存に不便であることから、第五号、第六号はA5版無表紙の誌要に改まった。第七号はそれに表紙をつけている。それだけでなく、第七号は色々な意味で飛躍的であった。すなわち、本号より学内的な会報欄を分離し（会報は年間一回発行に定める）、これまでの「法政大学国文学誌要」という表題を「国文学誌要」に改め、「金十銭」の定価をつけた。研究ノートであ

注) 第八号からは今日もみる、慶長版「ぎや・ど・ぺかどる」の表紙を模した図案と巻号が入っている。

誌要の内容は殆ど授業の成果を反映したものであるが、特に瓊末な資料主義とそれに野合していた放恣な鑑賞主義に対し批判的に自己を形成していた。したがって昭和九年十月、岡崎義恵が日本文芸学の樹立を唱え、文芸を人間の営みとみる態度に賛成しながらも、その人間理解の抽象性が逆に放恣な鑑賞を許すことになる、として批判を加えたのである。ナチスの宣伝相ゲッペルスが芸術の批

— 112 —

評を禁じ鑑賞にかえよと命令したというような時代であった（近藤忠義・回想十五年）。この知性の低迷の中で非妥協的な国文学誌要の果たした役割は非常に大きい。これを介して良心的な多くの学究が国文学会と結ばれたのである。

当時、国文学界全体も、これまでの研究成果が集大成されるとともに、新しい様々な試みが生まれ、まれにみる活気を呈していた。「文学」は昭和八年四月、「解釈と鑑賞」は昭和十一年六月に各々創刊され、そのための論争の場を提供していた。会員も論戦に積極的に参加している。特に哲学・心理学科との交流が深まり、協力して論戦に参加した熊谷孝は逸することが出来ない。また昭和十二年二月に刊行された近藤忠義の「日本文学原論」（藤村作の名前で出版）が、こういった国文学会の充実とともに生み出されたことは勿論である。

5 局外批評の精神（昭和十二年～二十一年）

誌要第四卷第二号の後記は、半ば誇らしく学派が形成されたことをうたっており、第四卷第三号は、当時、俳句研究、短歌研究誌でも論争的になっていた短歌の、永続性の問題に、近藤忠義が肉迫している。短詩型文学は日本的なものとして神秘化されやすいからであった。

所が、この発展の頂点で突然、誌要の刊行が止ってしまった。昭和十二年、第五卷一号はその付録たる会報を出したのみである。

費用は不足していたし、そだって来た研究者は徴兵で引っぱられていった。特にこの年、法政大学は経営上の理由で、文学部を縮小する案を出している。国文学会会員は卒業生を含め激しくこれに抗

議した。以下、毎年のように文学部の廃止案がで、ついに昭和十五年には文政・文芸学科と変ったのである。すでに昭和十二年は学派で孤立しては何もできない時代に來ていたのであった。

要するに国文学誌要は、何かみえない力でやまったと言うほかにない。風巻景次郎は、「文学」の昭和十二年度国文学界概評の末尾で次のように言っている。

「今年度は政治上、社会生活上異常に緊迫した情勢を体験したが、それにつれて国文学者中に、明らかに強権を暗に意識しつつ恐喝的言辭をなす人が発生した。……このような辱かしい現象があらわれた今日では、「お前は何故政治や法律や経済に行かずして国文学徒たらんとするのか」各人解答してはならないと。

国文学会は、この十二年以後、会としてまとまった活動をしていない。それが出来る時代ではなかった。ただ国文学会でつちかって来た局外批評の精神が良心的な多くの人々を協力させ時代に抗することが出来たといえよう。局外批評というのは伝統の根強い国文学を近代の学問にいくためには、局外者の意見を聞かねばならないということである。以下、列挙するにとどめるが、これらの活動には国文学会会員が積極的に実務にあたっているのである。

○雑誌「文芸復興」昭和十二年六月創刊、十一月まで五冊（十・十一月は合併号）。

○近藤忠義篇「日本文学入門」昭和十五年八月刊。

○近藤忠義篇「日本の女性文化」昭和十八年十二月刊。

法政大学文学部関係では、昭和十三年文学部の縮小案に対抗して、○文化講座（昭和十三年四月十四日より十四年三月二十日まで）開催。

これは午後五時より八時三十分まで行なわれ、学割も交付するといふものであった。講師には良心的学究をあつめており、聴講生が殺到するという活気を呈した。

○「文濠」(文芸学科の機関誌、後に文政学科も加わる)昭和十六年より十九年まで毎年一冊、計四冊(ただし、第四号は予科の雑誌「木月」との合併号)。

最後の雑誌は、国文学関係では近藤忠義・小田切秀雄・小原元・大堀喜美子・重友毅・正木信一が活躍している。しかし、会長近藤忠義は昭和十九年十二月に検挙され、やがて敗戦を迎えるのである。戦後は、文学部がはっきり独立し、国文学科は日本文学科となった。戦後のさまざまな動きの中で国文学会の活動を位置づけることは容易でない。ただ戦後、日本文学研究の出発点にあたっては、十年前、「国文学誌要」が提起した問題をさけて通ることが出来なかったことを言うにとどめておこう。「解釈と鑑賞」昭和二十一年四月号は鑑賞の仕方を特集し、「国語と国文学」、同年三月号は国文学の新方向を特集し、「文学」八・九月号も同様な試みをしている。十年の間、問題は正常な展開をしてこなかったのである。

最後に、国文学会会員は戦後、民主主義的文学の建設に積極的に参加したため、国文学会としてのまとまった仕事にとぼしい。一方戦後は戦前の学生が待ち望んだ演習(ゼミナール)を中心にまつまっている。しかし戦前に予期できなかったような新たな困難のなかで、そのままとまりが国文学会に結集して、「日本文学誌要」を復刊するためには、敗戦後さらに十年の月日を必要としたのである。

(散佚した国文学誌要については、昭和十一年卒業の原田幸衛・長峯調焉両氏の絶大な援助をえました。)



「新文芸」一九三四年、「文芸復興」一九三七年、「文濠」一九四一年、いずれも創刊号。